

# 亡き家族いつもそばに

## 広がる「手元供養」

遺骨や遺灰を自宅に置く「手元供養」が広がっている。ペンダントやミニ骨つぼなどの手元供養品の種類が増え、骨つぼを入れられるタイプの家具も登場。葬送などの在り方が多様化し、その身近なことで故人の身近なところで故人を祀る。東京都大田区の高橋貴美さん(30)は、4年前に54歳で亡くなった母親の遺骨を自宅のリビングルームに置いて供養している。「高橋家の墓にはまだ父方の祖父しか入っていない。山梨にあるので年に1、2回しか行けない。そばに置きたいという父の意向もありました」



骨つぼを入れられる仏壇風のご供養家具。「お墓が見つかるまで、これで保管しておくという方もいます」と話す「トータルリビング ユウキ」の小原御郎社長(横浜市都筑区)

## ペンダントやミニ骨つぼも

母親も生前、墓にはこだわらず、海に散骨してほしいとも話していたという。永代供養墓などを検討したが、「マンション形式の納骨堂は機械的な感じがしたし、他人と一緒にいるのもかわいそう。それなら家で供養したい」と考え、1年前に骨つぼが入る仏壇風の家具を購入した。

横浜市都筑区のオーダー家具会社「トータルリビング ユウキ」が「ご供養家具」と名付けて販売しているもので、白木のシンフルなデザインが洋風のリビングルームにも合う。同じ素材でお供え用の台も特注した。「母はケレリビングにいたのでも、そばに感じる感じがします」と口元を緩めた。

「ご供養家具」は1年前、取引先の建設会社社長から「家の中に置く墓を開発し

てほしい」と依頼され、商品化。メディアで取り上げられると、問い合わせが殺到した。「何らかの事情で遺骨を家に置いている人がたくさんいて、これで救われたい」と言われまして。特に子どもを亡くした方は、お墓に入れられないんです」と小原御郎社長。

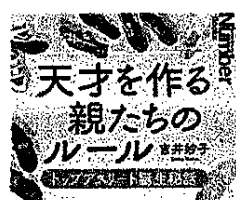
核家族化、少子化で家墓の継承が難しくなっている現代。永代供養墓、散骨、樹木葬などの新しい葬送の形が広がるとともに、遺骨や遺灰を収めるペンダントやミニ骨つぼなどの手元供養品が市販されるようになった。

2005年に発足したNPO法人「手元供養協会」(京都市)の山崎謙二会長によると、手元供養品には、墓の代わりということと、大切な人を失った悲しみを癒やすグリーフケアの役割がある。「身に着けるものはグリーフケアに置き換えることができる。部屋置き型はお墓の代わり。最近はお骨や樹木葬と組み合わせるミニ骨つぼやオフシェなど部屋置きの方が増えていく」と話す。

## 才能伸ばす 育児のヒント

「天才を作る 親たちの力」  
吉井妙

「育て方にはルールがある。プロ野球の大谷翔平、17歳の宇佐美貴史、卓球



意思疎通の手段  
手紙派は約1割

ネット

電子メールなどに押された手紙。市場調査会社ネクエの調査によると、手紙と対して、メールに力をつけている。普及率を比べると、手紙は約1割にとどまることが分かった。

調査はインターネットの20〜59歳の男女8000人